

学校教育のあり方 問い直す

京都女子大×朝日新聞

長い女子教育の歴史を礎とする京都女子大学。とりわけ発達教育学部は、「チーム学校」をキャッチフレーズに掲げて幅広い裾野とネットワークをもち、教員の養成に取り組み、朝日新聞社と共同で「チームで拓く学校と教育の未来」と題して教育会議を企画。学校教育を本質から見直す実践に取り組む工藤勇一さんを招いて議論をした。

基調講演

東京都千代田区立麹町中学校校長 工藤勇一さん



くどう・ゆういち 2014年から現職。学校教育を本質から見直し、学校運営に全教職員の力を結集し、形骸化した教育活動を徹底的にスクラップし、再構築している。著書に「学校の『当たり前』をやめた。」など多数。

技術論より「自律」「尊重」を柱に

やっている子もいる。バラバラだが、成績はどんどん上がる。考えてみれば、これが教育の本質だ。姿勢を正して一斉に正面を向かせるのが教育ではないと思ふ。学校は、何のためにあるのだろう。私が考えるに、ひとつは障害があってもなくても社会のなかでコミュニケーションを取りながら生きる力を伸ばしてあげること。もうひとつは様々な価値観を受け入れるための対話ができること。本来はこれら二つが学校の目的なのに、学習指導要領に従うことや授業時間をこなすことがいつのまにか目的になってしまっている。現在の教育は、ドイツのプロイセンが始めた一斉指導型が全世界に広まったもの。日本は今も踏襲している。しかし、もたの時代には、ひとつの会社に就職して定年まで勤めるというスタイルはなくなっている。なにが高齢者成長以降、日本は忍耐と礼儀、協力を強調し過ぎる。悪いことではない。しかし、発達障害の人には苦手な部分でもある。礼儀などを強調するあまり、彼らの自由な発想や独創性を抑圧してしまいかねない。これは本末転倒だ。



学校と教育の未来について語るパネルディスカッションに、たくさんの参加者が耳を傾けた。=2019年10月20日

大都会の中学校で、エリートの子が集中し、塾学習が織り込み済みだから改革できるのでは、と斜に構える人がいるかもしれない。事前に受け付けた参加者質問にも、それがにじんでいた。関西であまり見かけないこの工藤勇一さんのシュラッシュした校長も相まって、かという私もその一人だった。

社会・個人にも通じる考え方

思い込みは、きれいにひっくり返った。工藤校長の話は教育現場に限定されない組織論、社会のあり方、個人の生き方にも当てはまり、各参加者が仕事や学校、人間関係に置き換えてかみしめることができた。トラブルを恐るな。トラブルは自律を学ぶ絶好の機会。そこには希望を感じた。(中塚久美子)

朝日教育会議

14の大学・法人と朝日新聞社が協力し、様々な社会的課題について考える連続フォーラムです。「教育の力で未来を切りひらく」をテーマに、来場者や読者と課題を共

有し、解決策を模索します。申し込みは特設サイト (http://manabu.asahi.com/aef2019/) から。各会議の日時や会場、講演者などについても特設サイトをご覧ください。共催の大学・法人は次の通りです。

神田外語大学、京都女子大学、共立女子大学、慶応義塾大学、公立大学法人大阪、成蹊大学、拓殖大学、千葉工業大学、東京工業大学、東北医科薬科大学、東洋英和女学院大学、法政大学、明治大学、早稲田大学(50音順)

京都女子大学

京都女子学園を母体とする。大学は文学部と家政学部の2学部で始まり、その後の改組で現代社会学部、発

達教育学部を加え、2011年には女子大学として初の法学部を設置した。仏教の教えに基づく「心の教育」を特徴とする。発達教育学部で、専門性をもつ教育者を多数養成している。2020年に大学開学100周年を迎える。

パネルディスカッション



おちあい・りか 特別支援学校教諭の養成に11年目。発達障害専門の小児科医として、保護者・保育・教育や福祉行政の関係者と「チーム」で、子どもたちの育ちのサポートも行う。さまざまな教育現場で特別支援教育を実践できる教諭の養成を目指す。

子どもの未来 想像することから 落合さん

方、苦手な部分をどうカバーするかも考えながら導いていく。専門知識や実践する力も大事だが、私が最も大事にしたいのは想像力だ。目の前の子どもが大人になつた時、どんな生き方をしているか、その子にはどんな世界が見えているのか想像できれば、今ある課題や身につけておきたい力が見える。工藤さんがやってきた現場での実践には対立もあつたのではない。教職員とはどのような対話を重ねて合意形成をしてきたのか。工藤 自分には対立したという意識はない。「他人は動かないし、言葉は伝わらない」という思いを教員時代から持ち、子どもたちにもそう伝えてきた。伝わらないのが前提なので、自分がイライラすることはほめない。学校はトラブルが起きることが前提。教員には「トラブル対応の目的は？」と絶えず問う。そしてトラブルを子どもの学びに変える。我々が支援する子どもたちの信頼関係が増すようにする。さらに保護者の信頼も増し、結果的に保護者の学びにする。落合 発達障害のある子どもの中には不登校になるケースもある。「心が過労した状態」と表現する人もい。そこまで心が疲弊する前に救うには教員が想像力をもち、学校環境を変えていく必要がある。不安と焦りから「もうおまえの人生はおしまいた」と子どもを責める親もある。これがトラウマになることもある。親も子ども将来の見通しが持てず、とて

工藤さん トラブルだって 学びに変わる



おおかわ・なおこ 18年間公立小学校の養護教諭として勤務した後、発達教育学部のキャッチフレーズ「チーム学校」のもと、子どもたちの心と体の両面から支援でき、「チーム学校」の中で活躍できる養護教諭の養成を目指す。

不安になる。工藤 親は子どもの不登校で自分たちを責めているし、子どもは親への罪悪感に苦しんでいる。状況を変えるには親が自分を責めないことも重要。たとえば今、学校に通わなくても高校や大学に行ける制度があることを教える。コミュニケーションが苦手なために疎外され、人が嫌いなようになった発達障害の子はたくさんいる。「自分なんかダメだ」とも思っている。時間をかけて周りから受け入れられるようになる子もいるが、ずっと周囲を攻撃し続ける子もいる。すべての子どもに通用する言葉はない。教員はいつもその子に伝わる言葉を探している。大川 そこで力になるのが「チーム学校」であり、教員がそれぞれの専門性を生かして、連携・協働することが重要だ。特に養護教諭には学校全体を常に意識し、調整を図って処理する能力、学校と外部をつなぐ力が求められている。そのためには相手をよく知り、リスベクト(尊重)する気持ちが大変だと考える。落合 教員同士が大事にする部分の共有しながら、それぞれの得意分野、専門性を出し合って協力するチームをつくるという目標は日本の教育が変わるはず。可能性と希望を感じた。大川 学校の中で校長が子どもと真剣に向きあうことで、教員もそれを見て変わっていくのではないかと感じた。今までやってきたことをすぐに変えるのは難しいが、やってきた教育が本質にいいかどうか、今までは違う視点で見つめていきたい。

大川さん 教員の専門性 チーム制で生きる

工藤 固定担任制の時代、教員たちは派閥をつくり、敵対していた。そんな中で「養護教諭は孤独な仕事だ。だれとも相談できない」と言っていた。しかし全員担任制はチームなので敵対関係が生じない。養護教諭も本来の仕事ができるようになっていく。——学力の向上についてはどうか。工藤 ウチの学校は、取材を受けても学力に関する数字は出ていない。しかし子どもたちの様子を見ると、みんな自分で考えて勉強するようになっている。授業中に小説を読んでもいい。帰国子女で英語検準1級を持っている子は英語の授業を受けなくてもいい。評価するのは授業態度が中心。評価基準もすべてオープンにしている。成績は自分でわかる。そのうえでどうするかは自分で決める。何事もがんばれという精神論は説かないようにして、自分なりに課題を作らせる。これが「自律」だ。——最後に2人から感想を。落合 教員同士が大事にする部分の共有しながら、それぞれの得意分野、専門性を出し合って協力するチームをつくるという目標は日本の教育が変わるはず。可能性と希望を感じた。大川 学校の中で校長が子どもと真剣に向きあうことで、教員もそれを見て変わっていくのではないかと感じた。今までやってきたことをすぐに変えるのは難しいが、やってきた教育が本質にいいかどうか、今までは違う視点で見つめていきたい。

朝日教育会議

14の大学・法人と朝日新聞社が協力し、様々な社会的課題について考える連続フォーラムです。「教育の力で未来を切りひらく」をテーマに、来場者や読者と課題を共

有し、解決策を模索します。申し込みは特設サイト (http://manabu.asahi.com/aef2019/) から。各会議の日時や会場、講演者などについても特設サイトをご覧ください。共催の大学・法人は次の通りです。

神田外語大学、京都女子大学、共立女子大学、慶応義塾大学、公立大学法人大阪、成蹊大学、拓殖大学、千葉工業大学、東京工業大学、東北医科薬科大学、東洋英和女学院大学、法政大学、明治大学、早稲田大学(50音順)

京都女子大学

京都女子学園を母体とする。大学は文学部と家政学部の2学部で始まり、その後の改組で現代社会学部、発

達教育学部を加え、2011年には女子大学として初の法学部を設置した。仏教の教えに基づく「心の教育」を特徴とする。発達教育学部で、専門性をもつ教育者を多数養成している。2020年に大学開学100周年を迎える。